COP10に行ってきました

10月に名古屋で生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）が開催されました。会議場のとなりの白鳥公園では、「生物多様性交流フェア」として、世界の国々や日本各地から政府、NPO、学会などが生物多様性に関係する取組みなど紹介しました。

当然「ひとはく」も参加しました（10/18〜29）。約200の団体中、ただ一つの博物館でしたので、気合いがはいります。まずは人目をひくのが重要です。巨大オオクワガタ（長さ1.2mの革製）には、「本物？」といいながら、愛知県民、マスコミ、外国人といろいろな人が寄って来ました。そのうしろの昆虫標本にひかれて、さらに奥に人が進みます。これらの昆虫が育つ兵庫県の里山にも関心を示してもらいました。

兵庫県内の行政、市民団体などの取組みもパネルや冊子で紹介しました。中でも、キノコの美しい標本が並んだ「六甲山のキノコ展」（兵庫県立御影高等学校）は人気でした。土日に高校生自らが外国人に説明する様子は頼もしいものでした。神戸市立六甲アイランド高等学校など8団体の方々も展示物をもってきて説明してくれました。また会場の運営には、兵庫県自然環境課、ひょうご環境創造協会、APNセンター、コウノトリの郷公園のみなさんにご協力いただきました。感謝いたします。

市民団体・行政関係者・企業担当者は、ぶ厚い「ひとはく手帖」から「ひとはく」の博物館活動の意義を理解され、「うちにもこんな博物館がほしいですね」といってくれました。これは、再来年には20周年を迎える当博物館、さらには兵庫県にとって励みになる言葉です。今回得られたいろいろな経験が生物多様性にさらなる明るい未来をもたらすと信じています。

鈴木武（COP10推進タスクフォース）

生物多様性フェア会場。左奥が名古屋市国際会議場。

ひとはくのブース。オオクワガタが目立ちます。

名古屋のこどもたちにも大人気。

じっと昆虫を観察。

兵庫県立御影高等学校のキノコ展示も大人気。

井戸兵庫県知事に説明する三木山森林公園ボランティア。

ひとはくフェスティバル2010を開催しました

11月７日（日）にひとはくフェスティバル2010を開催しました。今年のテーマは「生物多様性」。「チリメンモンスターをさがそう！」や「ひとはく採れ取れビンゴ」など、生きものにふれる催しが盛りだくさんでした。

お祭り日和の中、館内と深田公園で５０の催しが行われ、会場は家族連れでにぎわいました。まんぶく屋台ではカレー、牛串、ラーメン、焼き芋など、行列ができました。芝生ステージは７つのプログラムがあり、タヨウ星人キューブ★パズルでは、１辺60cmのキューブ型パズルに来館者のグループが挑戦しました。

こうしてのべ２万１千人もの方々にご参加いただき、フェスティバルは無事終了しました。来年は2011年11月６日（日）に開催予定です。お楽しみに！

半田久美子（自然・環境評価研究部）

第６回共生のひろばを開催いたします！

ひとはくの恒例行事となりました、市民による自然・環境・文化についての研究・活動発表会「共生のひろば」を、今年度も2月11日（金・祝）に開催いたします。2009年度は58件の発表と330人の聴講者が、互いに自分たちのパワフルな活動内容やプロ顔負けの研究内容を紹介、活発に意見交換を行いました。（詳しくは第5回共生のひろば報告書をご覧ください！当館HP Topページ→出版物→単行本からご覧になれます。）

今年も多数の方の発表を予定しています。市民のみなさんの地域に対する熱気に触れてみませんか？ぜひ聴講にお越しください！

日時：2011年2月11日（金・祝）10:00〜17:00（予定）
場所：兵庫県立人と自然の博物館（口頭：ホロンピアホール、ポスター：企画展示室）
聴講のお申込み・お問い合わせ：「共生のひろば聴講希望」と明記の上、氏名・住所・TEL・FAX・E-mailをご記入の上、下記まで、ハガキ・FAXまたはE-mailでお申し込みください。（締め切りは2011年1月31日です。聴講は無料、観覧料のみ必要です。）
〒669-1546　兵庫県三田市弥生が丘６丁目 兵庫県立人と自然の博物館 生涯学習推進室 連携M
電話：079-559-2003　FAX：079-559-2033　E-mail：seminar@hitohaku.jp

橋本佳延（自然・環境再生研究部）

岩槻館長による“COP10ちょっと見学ツアー”

COP10期間中に開催された「生物多様性交流フェア」には、国際機関や行政、NPO、市民団体、企業など延べ300を超える団体が参加しました。ひとはくでは、研究員がそれぞれの視点から各団体の展示ブースを紹介して歩く“COP10ちょっと見学ツアー”を開催。10月23日（土）24日（日）の週末には、岩槻館長によるスペシャルツアーを実施しました。どちらも20名を超える参加があり、皆さん熱心にメモを取りながら会場内を歩いて回られました。長年、生物多様性に取り組んできた館長ならではの視点から、各省庁や団体の取り組みを、その舞台裏も含めてご紹介。約１時間のツアーは、日本のこれまでの生物多様性に関する取り組みの経緯を凝縮した内容となりました。生物多様性は行政だけが取り組むべきものではなく、NPOや企業など様々な団体がそれぞれの役割を担っていくことが大切。展示ブースはそれぞれでも、生物多様性というテーマのもとに取り組むべき内容は密接に関係しあっているのだということがよく分かりました。これをきっかけに、それぞれの活動をつなぐ生物多様性の交流の輪が広がっていくことを期待しています。

武田重昭（自然・環境マネジメント研究部）

ひとはく「いきものかわらばん」実施報告

ひとはく「いきものかわらばん」とは、身の回りで観察した生き物や自然に関する出来事を、１枚の紙に“かわらばん”としてまとめたものです。今年は「国際生物多様性年」に当たるので、身近な生き物や自然環境について興味・関心を高め、生物多様性や地球環境問題への理解を深めてもらおうと作品を募集しました。９月１日から３０日までの募集期間に、県内外の小中高等学校より８１８点の応募があり、審査の結果、館長賞３点、三田記者クラブ賞５点(うち大賞１点)、研究員賞３１点を決定しました。１１月７日のひとはくフェスティバルの中で表彰式が行われ、受賞者に岩槻館長より表彰状が授与されました。なお応募全作品は、１０月９日から１２月２６日の期間博物館３階展示室に展示し、多くの来館者にご覧いただきました。

受賞者一覧（敬称略・順不同）

館長賞（３点）
森山舞奈・玉城陽平（伊川谷北高１・２年）、小川哲矢（八景中１年）、林りょうせい（東須磨小２年）

三田記者クラブ賞（５点うち大賞１点）
越村拓史（南落合小３年、大賞）、谷口夏野花（須磨浦小３年）、たにともひろ（鹿の子台小２年）、大谷明恵（道場小６年）、吉村奈緒（市姫路高１年）

研究員賞（３１点）
日田琥珀（大宝西小６年）、宗實大成（鷹匠中２年）、内田隼人（魚崎小３年）、前田恵梨子（祥雲館高３年）、高橋陽菜（潮小１年）、伊原木空也（道場小１年）、田中義将（広野小３年）、松本早紀（柏原高２年）、池見優樹（武庫庄小３年）、宇野拓実（浜坂北小６年）、橘智子（津山高専１年）、高橋恭平（ゆりのき台小４年）、新居洸生（樟葉北小３年）、岩崎太登（母子小６年）、藤原さよ（県大附中３年）、矢部清隆（成徳小６年）、太田柊（柳学園中２年）、三輪菜月（大津小６年）、高木駿（荒井小３年）、中谷真緒（同）、釜江美海（同）、中野一貴（城北小３年）、餅井眞太郎（県大附高１年）、内木場勇人（神野小３年）、金澤美沙綺（同）、高橋明雅（すみれガ丘小４年）、杉村ゆうき（同）、吉川亜実（同）、辻明奈（西山小４年）、佐藤萌衣（明石小３年）、伊藤晴香（同）

※受賞作品の詳細は　→　http://hitohaku.jp/biodiv/school_visit.html

表彰式の様子

館長賞選考にあたって(岩槻邦男館長)

作品のうちにはよくまとまったものもありましたが、先生か先輩かの直接的な指導に効果があったと思われるようなものは、整っていても選考から外させていただきました。逆に、資料は良く整っていながら、まとめ方に最後の詰めが甘く、ちょっと助言があったらすばらしい作品になっただろうと惜しまれるものもありました。博学協働の進んでいる学校の人たちの作品に優秀なものが多かったのは、ひいき目に見たのではなく、それなりに成果が見られたのだと嬉しく思います。意図したわけではありませんでしたが、館長賞の３点は結果として、小、中、高校からそれぞれ１点ずつとなりました。

（生涯学習推進室スクールパートナー担当）

館長賞を受賞した３作品

館長を囲んでの記念撮影

シリーズ　身近な生物多様性

新属新種ヤクシマコモチイトゴケの発見

屋久島は誰もが一度は訪れてみたいと思う、魅力にとんだ場所の一つでしょう。世界遺産にも登録されているこの島は、コケ植物の宝庫でもあります。きわめてコケ植物の多様性にとんでおり、500km²ほどの面積にも関わらず、これまでに665種以上が報告されており、これは日本全国で知られているコケ植物の40パーセントにもなります。これほどたくさんの種が生育できるのは、温暖な気候と豊富な雨、そして急峻な地形がもたらす多様な環境が屋久島に備わっているからです。環境省の依頼により屋久島のコケ植物の分布の現状を把握するため、2004年から2008年にかけて島内の広範囲に渡って現地調査を行いました。その過程で、これまで見過ごされてきた新属新種のヤクシマコモチイトゴケが見つかりましたので紹介します。

この苔は、小杉谷や白谷雲水峡、あるいはヤクスギランド周辺といった、島内でもコケ植物が豊富な場所に生育しています。林内の細い流れの近くで、一年中良く湿っている場所で、背の低い灌木の枝に着生しています。当初は良く似た別種タマコモチイトゴケと混同していました。念のため証拠となる標本を持ち帰り顕微鏡の下で調べて、全く異なる形態をした別種だとわかったのです。さらに、葉緑体遺伝子の配列を調べてみると、これまでに知られているどの属にも当たらないことがわかりましたので、新属新種として報告することになりました。属名の*Yakushimabryum*は、「屋久島の苔」という意味です。

ヤクシマコモチイトゴケはこれまで雌植物だけが見つかっており、胞子体（植物の花に相当します）が知られていません。少し伸びた枝先につく、細長い葉の間には線形の無性芽（むかご）がたくさんつくられていますが、おそらくはこの無性芽によって無性的に繁殖しているものと思われます。昔はいたに違いない雄植物は今はどうなってしまったのかなど、ヤクシマコモチイトゴケを巡る解くべき謎はまだまだたくさん残されています。

秋山弘之（自然・環境評価研究部）

ヤクシマコモチイトゴケ生育環境　太忠岳

ヤクシマコモチイトゴケ

タチバナチビチョッキリは希少種か？

今年の４月に大阪府高槻市の「あくあぴあ芥川」で春の昆虫観察会がありました。そのときタチバナチビチョッキリが採集され、日本で（というか世界で）五ヶ所めの発見だということで話題になりました。福岡、香川（二ヶ所）、愛知に次ぐ五ヶ所めで大阪初で近畿初記録！というと何だかスゴそうですが、本当にスゴイのでしょうか？珍しいのでしょうか？希少種でしょうか？絶滅危惧種でしょうか？

当日、1匹しか見つからなかったので珍しい種類でしたし、世界に現存する標本は十数個体なので確かに「珍品」です。しかし「希少種」、つまり自然界にいる個体数じたいが多くない種かというとまだ…その可能性もありますが、この種のことを私たちが知らないないだけかもしれません。4ミリほどの小さい虫だし、図鑑には載ってないし、よほどのチョッキリマニアでないとそれと分かりません。生態も不明です。どの季節に何の樹で活動するのかが判明すれば、他の地点でも発見される可能性があるのですが。

タチバナチビチョッキリは長い口吻、発達した複眼と細長い胴体、長い脚をもっています。この特徴から、活発によく飛び、果実などに深く産卵をすることが予想されます。今回の高槻での発見で分布の広さが再確認されました。高槻ではエノキの大木の下のアオキにいました。近くにソメイヨシノも植わっています。福岡では照葉樹林のサクラで採れていますし、香川ではエノキが怪しいとされています。

以上が私たちが知っている全て。そんななので、もし絶滅に瀕していてもまだ気づくことはできません。希少かどうかもわからない、絶滅を危惧しようのない、まだ謎の虫なのです。

ではこの発見の何がスゴイのか？それは、ごく身近な公園にも謎の虫がいることが再認識されたことです。見過ごしがちなこの虫に「何だろう？」と気をとめた人（じつは小学生）がいたおかげです。

今年は国際生物多様性年で、それに関連して特定の希少種や絶滅危惧種が注目されがちです。象徴となる種を示した方がわかりやすい側面もあります。しかし本来、希少種の存在と系全体の多様性は別の事だという点はわきまえるべきでしょう。そして、特に小型の昆虫の場合、本当に希少な種類や地域限定の種がいても、その事自体を私たちが認識できていない可能性があるのです。高槻のタチバナチビチョッキリは、このことも気付かせてくれました。

沢田佳久（自然・環境評価研究部）

高槻産タチバナチビチョッキリ♀

高槻市芥川公園のエノキ

タチバナチビチョッキリの産地

ひとはく新聞２０１０|１２|２５号（平成22年12月25日号）
発　行：兵庫県立人と自然の博物館　〒６６９－１５４６　兵庫県三田市弥生が丘６丁目　電話：０７９－５５９－２００１（代表）
発行日：２０１０年12月25日(平成22年12月25日)
編　集：広報・出版支援担当/布施静香・上田萌子　生涯学習課/平松紳一・西岡敬三・矢野啓司・大本紗緒理　小林美樹（編集長）
印　刷：ウニヌガ印刷株式会社
※本紙の無断転用・転載はご遠慮ください。